

## 技術論・技術学

佐々木 享

## 1

技術教育にたずさわる者は、当然のことながら、技術とは何かという問題に行きあたることが多い。技術とは何かといういわゆる技術の概念規定をめぐる諸問題を研究するのが狭義の技術論で、このほか、現代社会における技術の問題——たとえば公害と技術というような問題を研究するいわゆる技術評論という分野がある。技術評論の根底には当然に技術の概念規定があるわけであるから、技術評論もたまた技術論という研究領域にふくめて考えることができる。

技術教育に関する技術論上のテーマとしては、技術評論のほか、技術の概念規定に関連した技能や技術学が問題となる。技能や技術学は、技術教育の内容にしたがってまた技術教育の方法を規定するものだからである。このような広範な問題を研究する技術論は、学問としては哲学の一分野として扱われるのがふつうであり、その理解のためには経済学の素養が要求される。その意味で、技術論をきちんと学習したいならば、同時に、あるいは前もって、科学的な経済学の基礎をしっかりと学習しておくことが必要だとおもう。経済学の素養なしに技術論に関する論議をすると、空疎なことばのもてあそびになりやすい。

## 2

技術論を、とくに技術教育との関係で学習しようとする場合は、以上に指摘したような広い視野から学習したほうがよいとおもう。ところが、幸か不幸か、わが国では、戦前からごく最近に至るまで、技術の概念規定をめぐる技術論論争と呼ばれる激しい論争が行なわれているために、この論争と無関係に技術論の学習をすすめることはむづかしいような状況になっている。この論争にまきこまれるのが嫌なばかりに、一部には、技術論に言及するのを避けたりする傾向さえみられたほ

どであった。

論争は、主として、(1)労働手段体系説、(2)意識的適用説、(3)行動の形態説をめぐりその他の説、という技術の概念規定をめぐって展開された。それぞれの説の主要な特徴については、『岩波講座・現代教育学』第11巻「技術と教育」に収録された山崎俊雄氏の「技術の構造」という論文に簡潔に要約され、それぞれの説に関する原著も注記されている。しかし、今日では入手しにくい本でもあるので、『技術教育研究』第10号の私の論文「技術論論争と技術教育」に主要な部分を適記しておいたので参照して欲しい。ついでにいえば、同誌には、山崎俊雄氏の「技術学と工学」という論文もっているので参考になる(定価500円、送料120円)。

論争そのものの内容や経過については、中村静治氏の『技術論論争史』上下2巻(青木書店刊)が大へん要領よくまとめているので参考になる。一読することをすすめる。ただし、この論争では、技能の問題はほとんど扱われていない。

## 3

私見では、技術教育の内容を説明できないなど意識的適用説は重大な弱点をもっている。にもかかわらず、この説は「技術は科学の応用である」という俗説に近く、主要な流布者である星野芳郎氏がジャーナリズムの波にのったりしたため、かなり広い支持者をいまだにもっている。かつては清原氏も支持していたし、今も鈴木寿雄氏はこれを支持しているといわれる。技術教育の点からみたこの説の致命的な弱点は、技術教育の内容としては技術学とともに重要な技能を正しく位置づけることができないうこと、このことが同時に、技術教育の重要な内容である技術に関する理論的な知識である技術学の位置づけをあいまいにしていることである。(名古屋大学)